

# 古墳時代の渡来人

## — 東日本 —

土生田 純之

### 1 高麗郡の建郡

2016年は武蔵国高麗郡建郡1300年にあたり、多くの催しが開催された。博物館においても、さいたま市大宮の埼玉県立博物館（埼玉県立歴史と民俗の博物館「高麗郡1300年—物と語り—」）と飯能市郷土館（「高麗人集結—かみつふさごう 霊亀二年やってきた開拓者たち—」）において記念の特別展が開催された。中でも飯能市は高麗郡上総郷に比定されることから、高句麗に由来する多くの優品が展示されているものと考え、勇んで観覧に望んだ。

ところが、展示されていたのは、当該期の遺跡を発掘すればよく出土する一般的な遺物ばかりで、特に渡来人を想定させるような特別なものはなかった。誤解を避ける意味であらかじめ述べておきたいが、筆者はこれらの展示品に失望したわけではもちろんない。むしろ以下に述べるように、歴史的な意味について大いに考えさせられるよい機会であった。しかし、一般の観覧者のうち多くの人は「高麗人終結—かみつふさごう 霊亀二年やってきた開拓者たち—」の展示テーマとは程遠い展示内容であったとの印象を持ったのではないかと思われた<sup>(1)</sup>。

さて高麗郡建郡1300年とは、『続日本紀』に霊亀二年五月「辛卯以<sub>二</sub>駿河、甲斐、相模、上総、下総、常陸、下野七国高麗人千七百九十九人<sub>一</sub>遷<sub>二</sub>于武蔵国<sub>一</sub>。始置<sub>二</sub>高麗郡<sub>一</sub>焉。」とあることから、霊亀二年（716）、現在の埼玉県日高市、飯能市周辺に駿河、甲斐、相模、上総、下総、常陸、下野（現在の静岡、山梨、神奈川、千葉、茨城、栃木諸県）の七国から高句麗人1799人を移動させて建郡したことが明らかであり、まさに2016年は高麗郡建郡1300年に相当したのである。

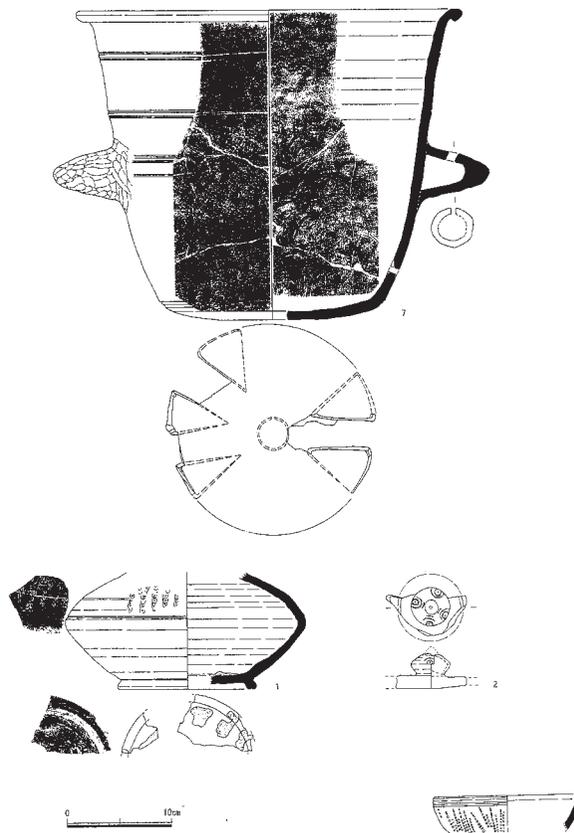
ところで、上述のように展示品の中には特別に渡来人を示す遺物は見られなかった。わずかに上総郷の中心集落と考えられる張摩久保遺跡の住居址から銅鏡の破片が出土したにすぎない。ただし、この出土品は鉛同位体比分析の結果、朝鮮半島南部産の原料で生産されていることが判明しており、後述するように重要な資料である。

筆者は飯能市郷土館の展示品の中に渡来系遺物がほとんど認められないのは、『続日本紀』にあるように、すでに各国で暮らしていた人たちが集められて武蔵国に連れてこられたからであり、生活様式が日本化した人々であったと考えている（渡来人1世のみではなく、2世、3世が生計を営んでいる家族もあったものと思われる）。張摩久保遺跡をはじめとする旧高麗郡に立地する遺跡からは上述各国の特徴を示す土器が出土しており、文献史料が示す記述内容を裏付けている。

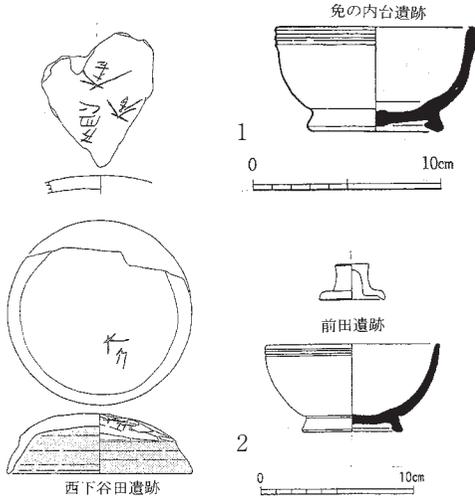
したがって先に記した銅鏡は、彼らの先祖が故地である朝鮮半島から携えてきた貴重品であり、自らの出自を示す貴重品として代々伝えられた「伝世品」であった可能性が考えられるのである。

## 2 持統朝における新羅人の下毛野国移配

持統天皇元年（687）、同三年（689）、同四年（690）、新羅から自ら帰化した新羅人が来朝し、いずれも下毛野国に移配されている<sup>(2)</sup>。この点について、栃木県宇都宮市西下谷田遺跡<sup>(3)</sup>をはじめ、同前田遺跡<sup>(4)</sup>、芳賀町免の内台遺跡<sup>(5)</sup>などから新羅産あるいは新羅の特徴を残すいわば新羅系土器が他地方に比べて多く出土していることが注目される。特に日用品である土器（中には坏や埴、壺の他に、煮沸具である甕や甑が出土しており注目される。いずれも日常使用するものであり、壊れやすいことから代々伝える、つまり伝世することは難しく渡来人自らが生産や入手、あるいは使用した遺物である可能性がきわめて高い。これらの新羅土器は重見泰によって7世紀後半から8世紀前半に比定されていることも、まさに帰化新羅人が日本に渡来した時期から彼らが生存したであろう時期に相当するものであり、興味深い<sup>(6)</sup>。



第1図 栃木県宇都宮市西下谷田遺跡出土のシラ土器

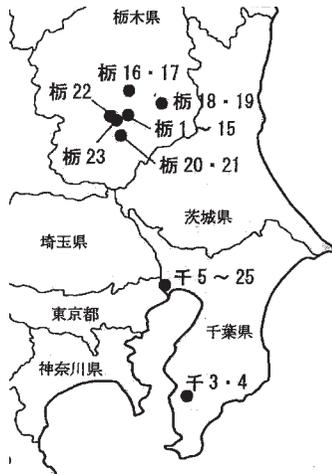


第2図 栃木県出土の新羅土器（刻書土器の1は「乃（戸々）岡大舎 大舎」と読める。「乃岡」は人名で（某部岡）、「大舎」（二字を合字）は新羅の官位を示す。また2は日本の土師器で「大乃」は大部を示す人名である。）

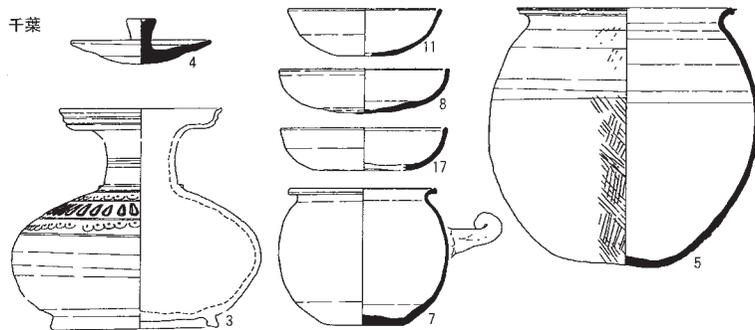


第3図 前田遺跡出土の新羅土器

前章で述べた高麗郡との相違は、故地から直接当該遺跡（下毛野）に渡来したか（持統朝における新羅人）、あるいは一旦他地方に定住して既にそれぞれの地域に適応する、いわば在地化した人たちであった（716年の高麗郡建郡にともなって移住させられた人々—当該期の天皇は元正天皇—）かの相違であると思われる。すなわち、人々が自らの出自について意識することと彼らが日々営む文化様式が必ずしも一致するとは限らないのである。『新撰姓氏録』には主要な氏族を大きく①皇別、②神別、③諸蕃に分けているが、特に③の諸蕃（渡来人の子孫）の人々は、始祖以来のいでたちを墨守して他と大きく異なるような事実はなかったものと思われる。



第4図 東日本出土新羅土器の分布（註(6)文献、1～15、西下谷田遺跡 16・17、前田遺跡 18・19 免の内台遺跡 20・21、落内遺跡 22、惣宮遺跡 23、郭内遺跡 3・4、野々間古墳 5・6、下総国分寺跡 7・8、曾谷南跡 9・10、須和田遺跡 11～25、国府台遺跡）



第5図 千葉県出土の新羅土器（註(6)文献、縮尺不同、3-4、野々間古墳 5、下総国分寺跡 7-8、曾谷南遺跡 11・17 国府台遺跡

さて、長々と7～8世紀のことを述べてきた。もちろん今回のテーマは古墳時代の渡来人であることを忘れてはならない。しかし、文献史料が多く残存する7～8世紀における渡来系資料と文献史料の様相は、文献史料がほとんど残らない（当該期の『日本書紀』は特に東国関連の記載内容は少ない）古墳時代を考察するにあたって大いに参考となる。以下では上記の考察を参考に、東国における古墳時代の渡来人について若干考えてみることにしたい。

### 3 考古資料からみる古墳時代における東国の渡来人

古墳時代において渡来系文物が顕著に見出せる時期は三度認められる。まず弥生時代終末段階から古墳時代初頭にかけての3世紀頃。次に5世紀中葉から後半にかけての頃。そして最後が6世紀後半から7世紀初頭にかけてである。以下それらの逐一について概観した上で若干の考察を行う。その際、既述の7～8世紀における東国の渡来人についての考察結果を参照・対比することを意識して論を進める。

#### イ 弥生時代終末～古墳時代初頭における東国の渡来系資料

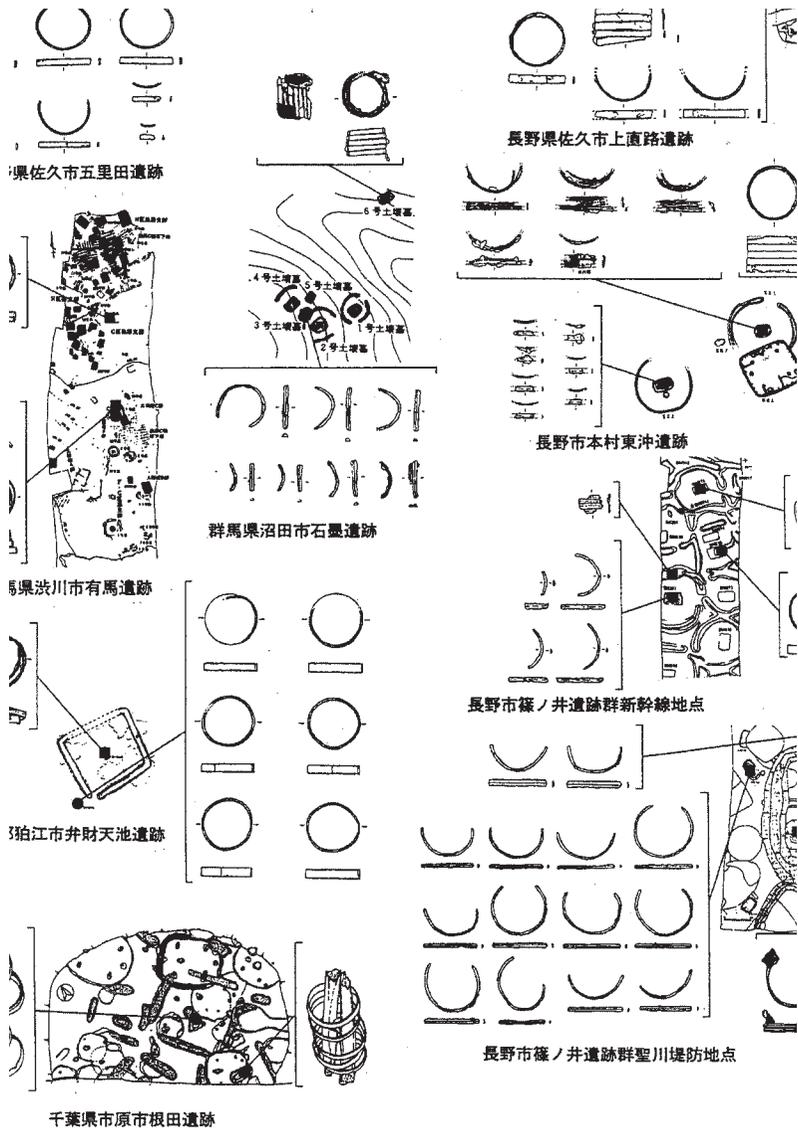
かつて関東をはじめとする東日本は、大陸文化の門戸である北部九州とは遠くかけ離れた位置にあることから、単純な文化伝播論的思考に基づいて、原始・古代史の展開上常に西日本に大きく後れを取るものとみなされてきた。しかし、以下に述べるように弥生時代後半には西日本とは異なったルートによる大陸文化の摂取が実在したものと考えられるようになりつつある。北部九州を介さない日本海を通した新文化の流入が西日本でも出雲や両丹地方などで意識されるようになってきた。東日本においても信濃を中心に西日本とは異なるルートによる新文化の摂取が確認されつつある。

さて、北信濃（以下北信）が北陸を経て朝鮮半島につながる経路を有するに至った時期は、弥生時代中期後半の粟林期にある<sup>(7)</sup>。北信では長野市松原遺跡（粟林期には200軒弱の住居が想定される）に代表されるように、当該期に大型集落が形成される<sup>(8)</sup>。さて粟林式土器は、在地における縄文的な要素を残す土器と北陸の弥生中期櫛描文の小松式が融合した結果、当地で成立

したものと思われる。この背景として不確実ではあるが、人骨の形質から渡来人の進出が予想されている。さらに長野県の鉄器出土量は東日本の中でも注目に値する量で、群馬県をはるかにしのいでいる。こうしたことから中期後半に朝鮮半島から海を渡り、北陸を経由して北信に至る経路が形成されたものと小山は想定している。

上の想定はもちろん単なる想像ではなく、以下に述べるような各種遺物の出土によって裏付けられているほか、次代の弥生後期に入ると近年ではこのような大陸（半島）系文物が長野、埼玉県下等で少しずつ未報告のものを含め聞かれるようになってきた。

まず弥生後期には金属製釧の報告が各地で聞かれるが、この釧を検討した野沢誠一によると、信濃の金属器は大きく次の二種に分けられる<sup>(9)</sup>。



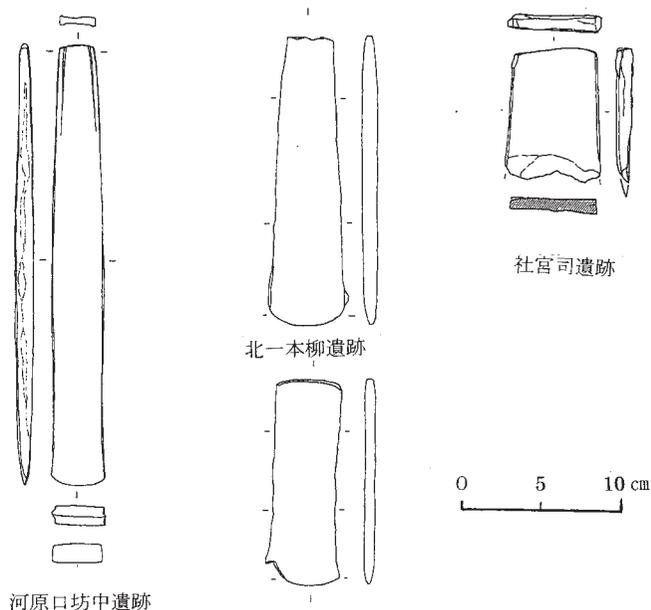
第6図 東日本出土の銅釧・鉄釧（縮尺不同・註(9)文献）

- ① 北部九州を中心とした分布を持ち、畿内においても出土例が少ない細形銅剣、巴形銅器、多紐細文鏡（垂直に加工）、鉄矛など本来の分布を超えて出土したもの。
- ② 県内出土金属器のうちで約4割と高い比重を占める釧は、円環もしくは螺旋の形状を呈し断面が扁平なもので東日本にのみ分布する。

この断面扁平な釧に注目して野沢は以下のような考察を行った。

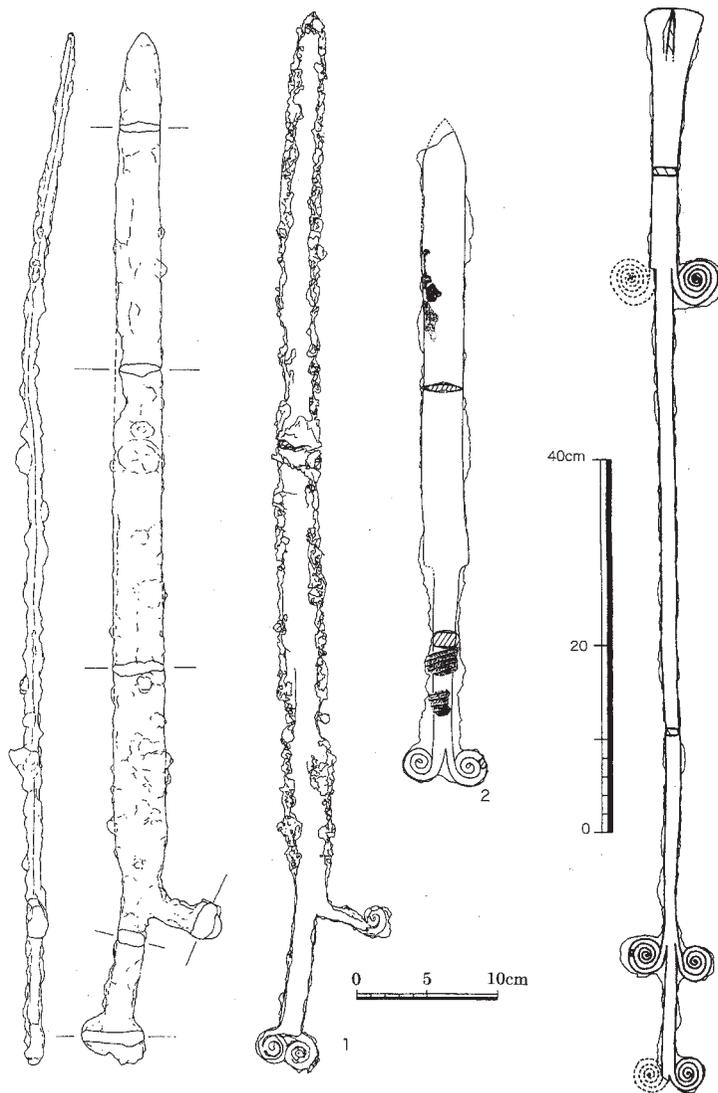
さて、上述の釧は長野の場合墓地からの出土量が多いのに対し、関東・東海では小銅環（指輪）や破片など再加工品の頻度が高く、中央高地が本来的な使い方をしている。これら釧と東日本出土鉄剣の分布はほぼ重なることなどから、箱清水式土器を持つ人々は日本海ルートを経て東日本に入る鉄素材の流通を抑えていたと想定した。ところで带状円環型銅釧の場合、国内では系譜が追えず、大邱坪里洞出土「円形環状金具」に類似していることに注目している。坪里洞出土品は紀元1世紀前半であり、带状円環型銅釧の最も早い例は現在のところ後期初頭なので若干の年代差がある。しかし近年における年代論の動向は両者の懸隔を大きく見積る必要がないところまで弥生時代の年代を押し上げており、年代論としてそれほど無理のない想定といつてよいであろう。

次に俎上にあげなければならない資料は、板状鉄斧である。板状鉄斧は神奈川県海老名市河原口坊中遺跡から出土した例が最も保存状況がよい。これは全長28.5cm、幅3.4cm、厚さ1.3cmを測る。本資料は明確な遺構ともなっていないが、搬出資料から弥生時代後期前半に属する資料と考えられている<sup>(10)</sup>。このほか、東日本出土例として長野県佐久市北一本柳遺跡<sup>(11)</sup>や同社宮司遺跡<sup>(12)</sup>出土例がある。両資料とも弥生時代後期後半に属する資料と考えられている。これら板状鉄斧の系譜について、高久健二は韓国慶尚北道慶州市舍羅里遺跡（1世紀後半）<sup>(13)</sup>や慶尚南道金海市良洞里遺跡（2世紀後半）<sup>(14)</sup>など朝鮮半島東南部の資料に祖形を求めている<sup>(15)</sup>。



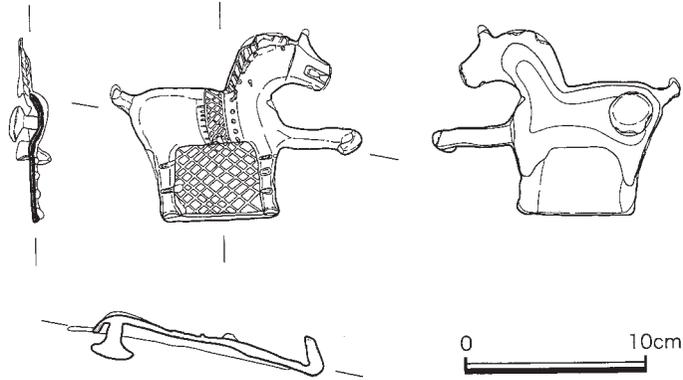
第7図 弥生時代の板状鉄斧（東日本）

さらに長野県上田市上田原遺跡では第40号土坑から鉄鉾が柄の付いた状態で出土している。これは三国時代の鉄矛に比して関が折り返し状になっていることなど明らかに古相を示しており、日本の弥生時代に相当する時期の所産と思われる。鉄鉾が出土した土坑から共伴遺物がないので直接的に年代を付与することができないが、隣接遺構の年代等からおよそ弥生時代後期の年代が与えられるものとみて相違ないであろう<sup>(16)</sup>。



第8図 渦巻文裝飾付鉄剣・鉄器 (1、根塚遺跡 2・3金海良洞里212号墓)

このほか長野県木島平村の根塚遺跡から出土した渦巻裝飾付鉄剣がある。渦巻裝飾も朝鮮半島東南部で原三国時代から三国時代にかけて盛んに用いられた意匠である。同遺跡も弥生時代後期後半に属す<sup>(17)</sup>。



第9図 浅川端遺跡出土の馬形帶來鉤

また長野市浅川端遺跡からは、馬形帶來鉤が出土した<sup>(18)</sup>。馬形帶來鉤は他には岡山市榊山古墳(5世紀初頭、全長360mを測る巨大古墳、造山古墳の陪冢と考えられる)出土品が知られるのみである<sup>(19)</sup>。ただ、本遺跡は明確に遺構に伴うものではなく、詳細な年代は不詳であるが、おおむね弥生時代終末～古墳時代初頭に属するものと思われる。馬形帶來鉤は朝鮮半島の西部方面(後の百済地域)から最も多くの資料が出土しているが、洛東江中・下流域からの出土例もある。したがって他の半島系文物同様、朝鮮半島東南部からの将来品である可能性も考えられる。

以上、長野県を中心として弥生時代後期頃には大量とは言えないものの、決して無視しえない数量の渡来品が出土している。これらの中には西日本とは系統を異にする資料も含まれることから、本節冒頭で述べたように、日本海を直接わたって招来された資料もあるものと考えられる。北近畿の京都府丹後市奈具岡遺跡は弥生時代中期の大集落であるが、さかんに玉作りが行われていた。多量の出土品の中には玉作りに使用するものを始め鉄製品も多く、中でも中国原産の鑄造鉄を原料とするものが含まれていたことは注目に値する。こうして北部九州や後の「畿内」を経ずに、直接朝鮮半島やさらに中国大陆との通行路が開かれていたことが窺えるのである<sup>(20)</sup>。こうした事実は、既述のように北陸を経由した「海の道」によって東日本に朝鮮半島の文物がもたらされた可能性を強く示唆するものである。ただし、いずれも貴重品であり、一般には入手しがたい文物であることから、5世紀後半における渡来系文物の中に日用品が含まれていることと比較すると、5世紀のように多数の渡来人が移動・移住した可能性は少ないものと考えられる<sup>(21)</sup>。もちろん、文物が自動的に移動することはありえないので、これを招来した人々が存在したことに相違ないが、ごく少数の人たちであったものと思われるのである。

#### ロ 5世紀後半における東国の積石塚

当該期東国の各地で一斉にといつてよいほど積石塚が造営される。具体的には奥三河、遠江、北信、甲斐、西毛などである。しかし、在地における様相は各々異なっており、在地社会の在り方とも密接な関連性を有するものと判断される。以下では発掘調査によって積石塚出現の時期と具体相が明らかな遠江、北信、西毛の各地について概観したうえで、各地における様相の相違やそれにもかかわらず一斉に出現した背景について考察する。

#### ① 遠江 浜松市の内野古墳群はいくつかの支群に分かれ、5世紀後半から8世紀初頭に至る

まで築造された諸古墳群の総称である。5世紀後半中心に築造された積石塚は、東谷・西谷に細分される二本ヶ谷古墳群（総数30基以上）である。両者の中間には幅100m強、比高差約20m、西から5m程度の尾根がある。この尾根上の古墳は7～8世紀の築造であり、5世紀後半の積石塚とは直接の関係はない。一方、東谷の東には比高差10m程度の尾根が所在するが、この上には5～6世紀の封土墳が分布している（辺田平古墳群・約20基）<sup>(22)</sup>。



第10図 二本ヶ谷古墳群東谷群



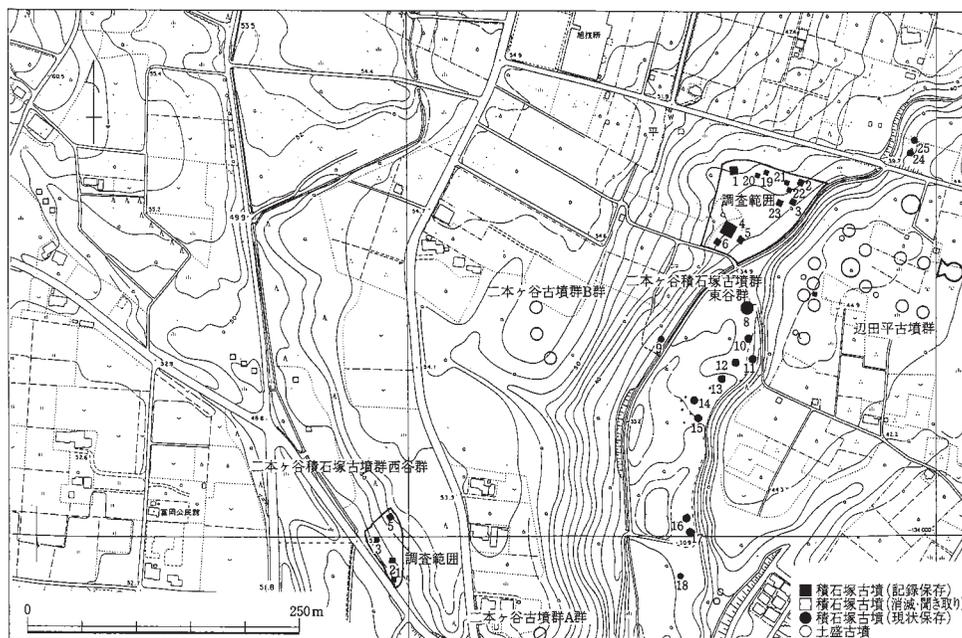
第11図 内野古墳群の分布図

さて、二本ヶ谷古墳群の積石塚はおおむね一辺4～5mから10m強までの方形ないし長方形である。このほか一辺2m前後の小型積石塚（うち1基は円形）も6基が群中の一面に集中している。これらの主体部はいずれも礫床上の木棺直葬であったようだ。ただし木棺埋置に際して地山を若干掘りこんでいる。副葬品は土器類が大半を占め、他に少量の鉄製品（鎌・刀子など）が一部の古墳で見られたのみである。築造年代の判明するものは5世紀第4四半期が大半で、一部は第3四半期に遡上する可能性がある。

二本ヶ谷古墳群に対して<sup>へたびら</sup>辺田平古墳群は、6世紀初頭の積石塚・14号墳（5.9×5.5m）を除いて円墳が主体で前方後円墳1基（1号墳・全長20m）を含む。5世紀第4四半期の1号墳を嚆矢として6世紀中葉頃まで継続的に築造された。ここで注目されるのは、東側の古墳は相互に一定の距離があり十分な墓域を獲得しているのに対し、西南の一面は互いに裾を接するように築造されていることで、前者に対し後者は墳丘規模が相対的に小さい。内部主体は判明しているものは木棺直葬のほかに竪穴系の施設（石槨？）がある。特に注目されるのは、東側の方が地山を掘りこまないものが大半であるのに対し、他は二本ヶ谷同様地山掘り込みによることである。この一群は6世紀初頭の積石塚（14号墳・方墳）を造墓活動の契機としているので二本ヶ谷古墳群の系統につながるものと考えられる。副葬品には土器類が大半で顕著なものはないが、唯一の前方後円墳である1号墳には埴輪が樹立されていた。

以上から次の諸点が留意される。

- (a) 尾根上の辺田平古墳群も谷に立地する二本ヶ谷古墳群も5世紀後半に造墓活動を開始すること。



第12図 二本ヶ谷古墳群の分布図

- (b) 辺田平古墳群の墳形は円形を基本とするのに対し、二本ヶ谷古墳群は方形を基本とすること。
- (c) 二本ヶ谷古墳群は地山下に内部主体を構築するのに対し、辺田平古墳群のうち当初から築造された東側では地山を掘りこまないで墳丘中に設置したこと。これに対し6世紀になって築造を開始した西南部の一面に築造された古墳は、二本ヶ谷同様地山下に設置しているのである。

以上のように対照的な二群に分けることができる。

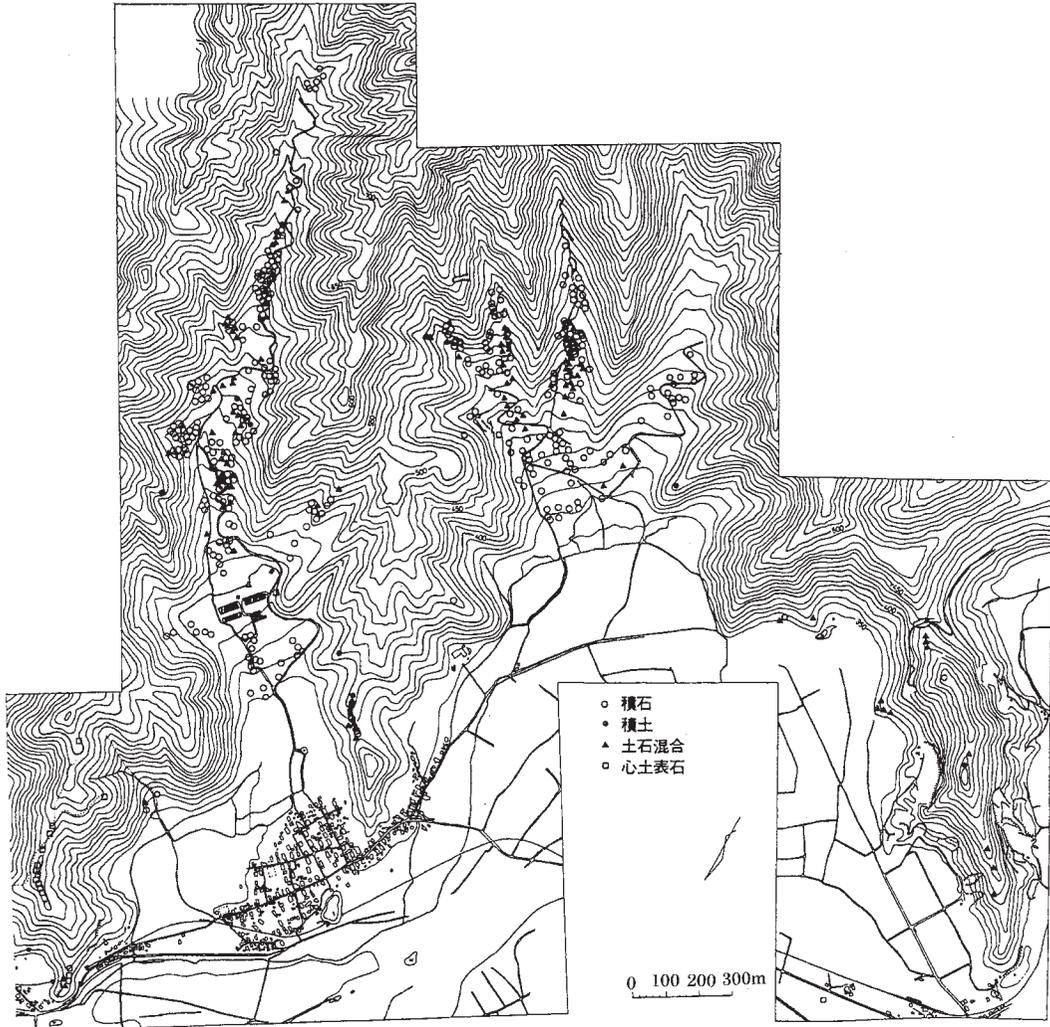
辺田平古墳群中で西南部の古墳は積石塚(14号墳)を築造の契機としたものであり、内部主体の構造からも二本ヶ谷古墳群被葬者の後裔であると思われる。以上から二本ヶ谷古墳群および辺田平古墳群西南部の古墳を渡来人墓、他の辺田平古墳群の性格を在来倭人墓に比定してよいであろう。主体部を地下に埋設する構造も当該期の朝鮮半島においては通有の構造である。

以上両者は出自の相違によって厳然と区分されていたが、渡来人墓がやがて在来倭人墓の一面に築造されるなど厳しい差別はなかった。ただし、当初は尾根上の倭人墓に対し渡来人墓は湿気のある谷の中に墓域を設定され、尾根上に造墓が許された後でも墓域や墳丘の規模にやや差異が見られるなど、全く差別がなかったわけではない。

- ② 北信 長野市の大室古墳群は、総数500基のうち積石塚は400基前後(他は封土墳、積石塚・封土墳の中には両者の中間形態の土石混合墳も混在しているものと思われるが、発掘調査された例が少なく確実なことは言えない)を占める日本有数の積石塚集中地である<sup>(23)</sup>。すべて円墳であり、1基の前方後円墳が存在するが、大室古墳群が造墓活動を開始する相当前に遡上するもので直接の関係はない。上述の積石塚と封土墳の関係についてはおおむね6世紀中葉を境に封土墳へと移行するようである。積石塚と封土墳の間には墳形や規模などに差異は見られず、大半が直径15m前後を測る。大室古墳群の積石塚開始時期は二本ヶ谷古墳群同様、5世紀後半と考えられる。ただし、北信の場合は4世紀末に遡上する須坂市八丁鎧塚1号墳以来大室古墳群の形成開始時期まで継続的に積石塚を構築していたことが知られている。



第13図 大室古墳群(整備前の状況)

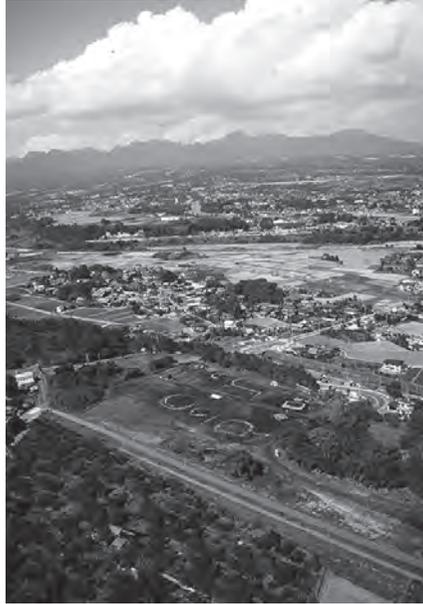


第 14 図 大室古墳群の分布図

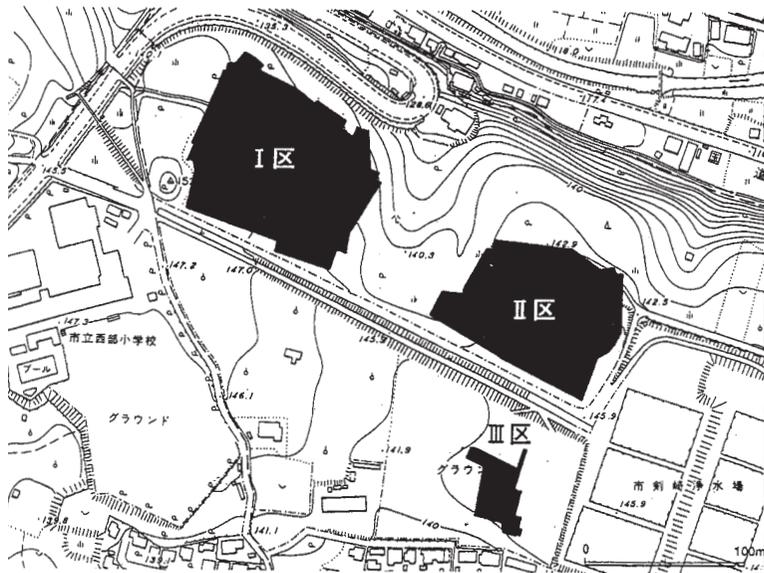
大室古墳群の積石塚形成開始の初期には合掌形石室が組み合わせのように築造されており、このことをもって百済系渡来人墓に比定する説や後世の史料に高句麗系渡来人の居住が確認されることから、高句麗系渡来人墓に比定する説などが提起されてきた<sup>(24)</sup>

大室古墳群は積石塚から封土墳へと構造を変化させながら、5世紀後半から少なくとも6世紀後半に至る長期にわたって造墓活動が継続されていた<sup>(25)</sup>。しかし、遠江や後述する西毛のように在来倭人墓と渡来人墓の明確な分離は確認できない。むしろ5世紀後半には北信の他地域においても積石塚が構築されており、これらすべてを渡来人墓に比定することは難しく、在来倭人の一部も積極的に積石塚を採用したものと思われることも、こうした考察を支えるものとみてよいであろう

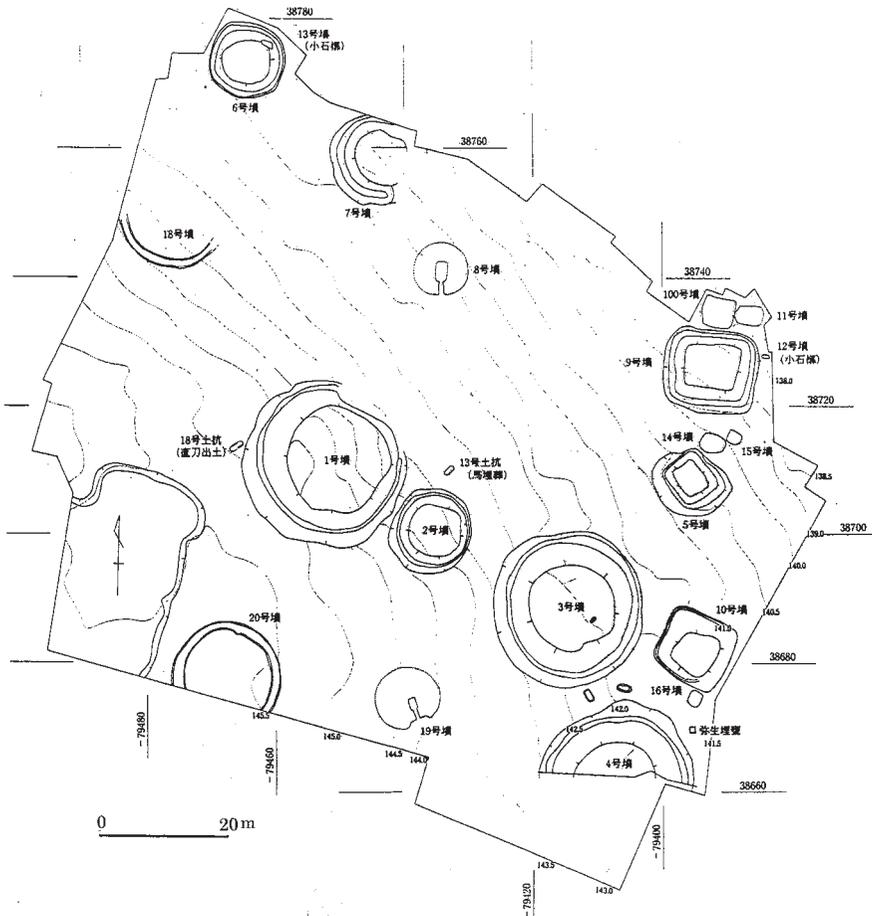
- ③ 西毛 西毛（群馬県高崎・渋川周辺）においても積石塚は各地で構築されているが、以下では高崎市剣崎長瀬西古墳群<sup>(26)</sup>を俎上に挙げる。



第 15 図 剣崎長瀬西遺跡 I 区 (正面の山は榛名山)



第 16 図 剣崎長瀬西遺跡の地区分布



第 17 図 剣崎長瀬西遺跡 I 区の前墳分布図 (5 世紀後半・8・19 号墳は後期古墳)

第 1 表 剣崎長瀬西遺跡 I 区古墳一覧

古墳番号	墳形・規模	出土遺物	備考
1	円・径22m	埴輪	2段築造・2m幅の周堀を有す
2	円・径10m	埴輪・土師器坏	
3	円・径17m	埴輪	2段築造・2m幅の周堀を有す
4	円・径16m	埴輪	2段築造
5	方・6.6×5.7m	鉄刀	主体部・竪穴式小石槨(2.5×0.5m)
6	円・径10m	埴輪・土師器坏	主体部・竪穴式小石槨(1.8×0.4m)
7	円・径10m	埴輪	
9	方・10×9m		2段築造?
10	方・9×8.2m	金製垂飾付耳飾・韓式系土器	
11	積石塚2.6×2.3m		主体部・竪穴式小石槨(1.1×0.4m)
14	積石塚2.9×2.3m		主体部・竪穴式小石槨(0.9×0.4m)
15	積石塚1.6×1.1m		主体部・竪穴式小石槨(0.9?×0.3m)
16	積石塚2.2?×0.9m		主体部・竪穴式小石槨(0.9?×0.3m)
18	円・径14m?	埴輪	周堀の一部のみ発掘
20	円・径14m?	埴輪	周堀の一部のみ発掘
100	積石塚4.2×3.7m	埴輪・土師器坏	主体部・竪穴式小石槨(1.5?×0.4m)

\*数値は概数である。

\*後期古墳の8・19号墳は省略している。

\*積石塚以外の古墳は基本的に浅く狭い周堀を有するが、表には比較的顕著な1・3号墳のみ記した。

\*表に記したものの他に小石槨墓(12号墳)や馬殉葬墓(13号土坑)等がある。



第 18 図 剣崎長瀬西遺跡 10 号墳出土の  
金製垂飾付耳飾



第 19 図 剣崎長瀬西遺跡 13 号土坑出土轡

剣崎長瀬西遺跡は弥生時代から 7 世紀に至る各種遺構を有する複合遺跡であるが、5 世紀後半に限ると小谷を挟んで西側の I 区（古墳群）と東側の II 区（住居群）に分けられる。I 区の場合、封土墳（円墳）と積石塚（方墳）とに明瞭に分けられる。立地（封土墳は比較的広い範囲に展開するのに対し、積石塚は狭い範囲に密集するように築造されている）や、埴輪の有無（封土墳には埴輪があり、積石塚は認められない）なども両者の差異を際立たせている。また積石塚の 10 号墳は金製垂飾付耳飾や韓式土器など渡来遺物が出土した。さらに両者の中から馬犠牲坑が確認され、洛東江流域地方の生産にかかると考えられる轡一式が装着された馬が発見されている。

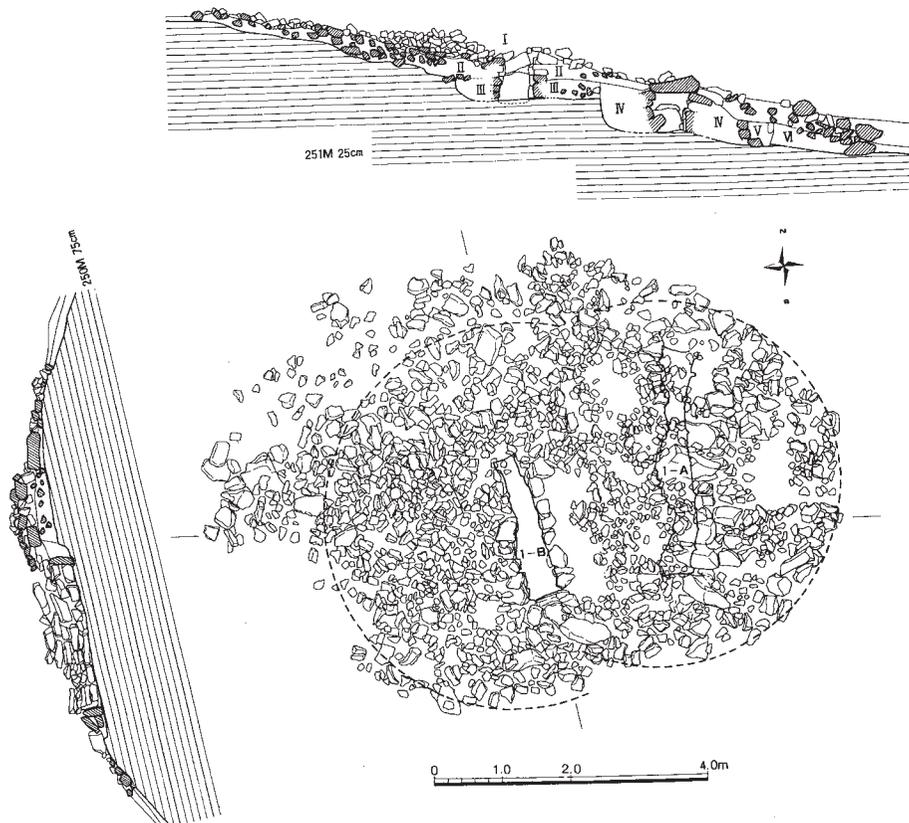
I 区の場合、当該期の住居 31 軒中、実に 26 軒に竈が備え付けられていた。さらに I 区の前古墳築造直前には 16 軒の住居が営まれていた（5 世紀中葉）がうち 6 軒が竈備付住居であった。埼玉県児玉郡や群馬県西部が東国の中にあつて比較的早い段階から造り付け竈を備えた住居が普及していたことを考慮しても、構築時期・竈を持つ住居の比率いずれも驚くべき普及を示している。

封土墳と積石塚の両者には共通する面も認められる（封土墳と積石塚の多くは二段築造であるが、主体部はいずれも二段目の上におかれている。ただし、一段目は地山の周囲を削り出しただけであるので、大半の古墳における主体部の位置は地山直上となる。また、

一段目の側面にはいずれも葺石が施されていた（ここでいう積石塚とは、二段目に石材のみにおいて二段目が一般的な積石塚と同様の構造を呈するものであり3基確認されているが、他に二段目に相当する部分のみの極めて小規模な積石塚が5基存在する）。

以上から封土墳を在来倭人墓、積石塚を渡来人墓に比定して相違ないであろう。ただし、II区の様相からみて、居住区においてはさほどの差異はなかったように思われる。そのことは、続く6世紀になると積石塚は確認されておらず、渡来人と在来倭人との融合が進行したのではないかと思われるのである。つまり、①の遠江の状況とも類似した現象が窺えるのである。

- ④ 各地様相の相違について 以上遠江、北信、西毛3か所の代表的積石塚古墳群について概観した。遠江と西毛には共通する現象が多く見られたのに対し、北信はこれとは相当状況を異にすることが知られた。前者の場合、渡来人墓と目される積石塚と在来倭人墓の封土墳がいくつもの点で対照的な状況を示している。つまり、積石塚は渡来人墓としていわば出自を示す役割を担っているのである。当該期（5世紀中葉～後半）の朝鮮半島では、洛東江中流域の水谷洞2洞1号墳をはじめ、鳩岩洞古墳群や多富洞古墳群などの積石塚が構

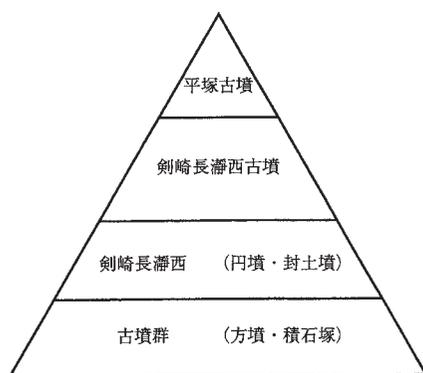


第20図 韓国慶尚北道漆谷郡多富洞古墳群の積石塚（昌原大正校博物館『大邱～春川間高速道路建設予定地域内文化遺産発掘調査報告書』1991年）

築されていた。これらの地域は広い意味での加耶に属し、早くから親新羅の地域となっていたので、あるいは新羅の積石木槨古墳との関連性も窺える。したがって、百濟前期（～475年）の王墓の可能性が高い石村洞古墳群をはじめとする百濟前期古墳との直接的な関連性は考えにくいものである。

これに対して北信の場合は、積石塚の中に渡来人墓が含まれているのは確実であるが、これらの中には在来倭人墓も含まれているものと思われる。北信における5世紀代の古墳中には積石塚が多く、特に大室古墳群の場合は近在の他の古墳群に比して圧倒的な数の古墳が築造されており、これらすべてを渡来人墓とみるならば、「倭人墓がない」という状況になりかねない。

この相反する状況は何に由来するものであろうか。両者の相違を端的に述べるならば、当該期における首長墓の有無にある。遠江や西毛の場合、近隣に大型古墳が所在し、当該地を支配する強い強権の存在が予測されるのに対し、北信にはこのような強権の存在をうかがわせる大型古墳が不在である。4世紀初頭の森將軍塚古墳以来、川柳將軍塚、倉科將軍塚古墳、そして5世紀前半の土口將軍塚に至るまで大型古墳の築造が続く。しかし土口將軍塚古墳の築造以後大型古墳の築造は途絶えた。また既述の通り須坂市八丁鎧塚1号墳以来北信各地において積石塚が構築されており、在来倭人も積石塚古墳に対する違和感は払拭されていたものと思われる。こうして、在地における強権によって出自の明示を強制された遠江や西毛の地域と、そうした強権が不在でかつ在来倭人との共生の歴史がある程度長く続いた北信との相違につながったものと考えられるのである。



第21図 平塚を頂点とする身分構造（ピラミッド構成）

これに対して伊那谷（南信）では多くを数える馬の犠牲坑をはじめ、東国の他地域に比して早い段階での竈付住居や須恵器の導入・普及<sup>(27)</sup>など渡来人の存在が確実視されるにもかかわらず、これまで積石塚は確認されていなかった。最近ようやく「発見」されたものの、わずかに数基を数えるのみである<sup>(28)</sup>。当地においては群集墳も未発達であるのに対し、首長墓の数が多くがこれまで注目されてきた。かつて白石太一郎によって示唆されたように<sup>(29)</sup>、馬匹生産地や生産された馬を東国各地から「畿内」へ輸送する際の中継地として重視された結果、「畿内」大豪族と密接な関係を結んだ南信各地の小豪族が前

者との関係を梃子として大型古墳を築造したのであり、馬匹生産の担い手として渡来人が当地に移住したのであろう。ただし、既述したように当地の自立的発展ではなかったために複雑な階層構造は発生せず、これに基づく群集墳も十分に展開することがなかった。したがって当地の渡来人が他地域に比してことさら冷遇されていたわけではない。すなわち、積石塚は新来の渡来人に共通する墓制であり、地域によって強制される場合（遠江、西毛）、在来倭人をも巻き込んで自主的に採用する場合（北信）、特殊な例外を除いて共同体を代表する首長のみが古墳を造営することができた地域（南信）の3類に分類できるのである。つまり、積石塚を軸にした古墳の在り様は当該社会の社会構造を知りうる絶好の考古資料としての位置づけが与えられるのである。

次に、これらの各地域は北信と西毛を除き、当該期まで相互に特別密接な関係を維持してきたのではない。にもかかわらず5世紀後半というおおむね同時期に一齐に積石塚を構築するに至った背景（既述の通り北信は4世紀末に積石塚の構築が開始されているが、構築数が飛躍的に増加するのは大室古墳群の古墳築造が開始される5世紀後半である）を考察する必要がある。こうした各地方に共通の現象をもたらす原動力としては、「畿内」においてほかに考えられないことである。当然その理由は馬匹生産であり、小鍛冶を中心とした鉄器生産も合わせて考慮しなければならない。5世紀後半という時期は生産力の飛躍的増加と、「畿内」権力が他地方を圧倒する時期と評価される。文献にみる雄略朝に相当する。こうした点を考慮に入れるならば、「畿内」による東国各地に対する支配力の強化と密接に関連するものとみて間違いのないであろう。ただし、既述のように各地の状況によって渡来人の位置づけは異なっている。「畿内」の支配力は確実に強化されたものの、在地社会の内部にまではいまだ干渉することがなかった、あるいはできなかったものとみられるのである。

#### ハ 6世紀後半～7世紀初頭における上毛野の渡来系文物（威信財）

6世紀後半の西毛は、高崎市綿貫観音山古墳（全長98m）と前橋市総社二子山古墳（全長約100m）を盟主とする一連の前方後円墳がある。これは角閃石安山岩削り石積み石室という規格性の高い横穴式石室を共有する、<sup>(30)</sup>もので、5世紀後半から継続した西毛首長連合（当該期は舟形石棺を共有する）<sup>(31)</sup>を象徴するものと考えられる。これらの古墳からは特に新羅系の優品が多く出土することが特徴である。玉村町の小泉長塚1号墳<sup>(32)</sup>や小泉大塚越3号墳<sup>(33)</sup>からは金銅製冠が出土し、前橋市山王山金冠塚古墳からは新羅の冠を特徴づける出字形冠が出土している<sup>(34)</sup>。早くから横穴式石室が開口していた二子山古墳の副葬品は詳細不明であるが、観音山古墳からは数多くの優品が出土している<sup>(35)</sup>。心葉形杏葉や三壘環頭大刀柄頭など新羅系遺物の他に鉄冑や銅製水瓶は中国系（北朝）遺物として人口に膾炙している。特に水瓶は北齊における鮮卑族の貴族である庫狄廻洛（562年没）の墳墓出土品に類似している<sup>(36)</sup>ことが指摘されてきた。

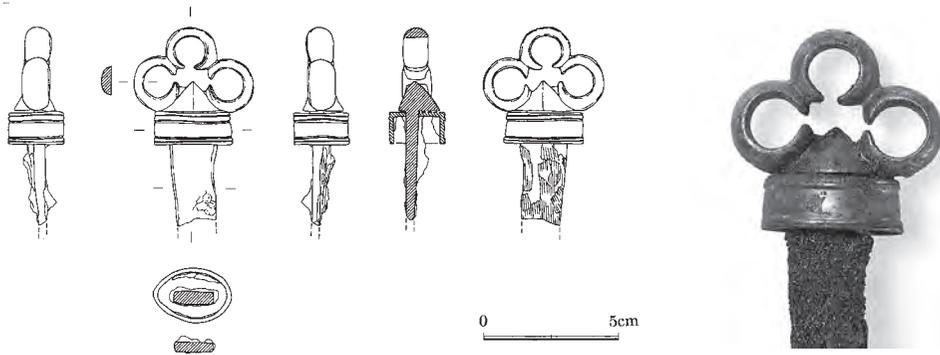
ところで、国立歴史民俗博物館の斎藤努教授による鉛同位体比分析によれば、角閃石安山岩削り石積み石室を有する一連の古墳副葬品の多くは朝鮮半島の原料を用いている<sup>(37)</sup>。上述の通り、観音山古墳出土品の中に中国出土品に類似したものが含まれることを勘案するならば、これらの事実には密接な関連性を窺うことができるのである。



第22図 綿貫観音山古墳

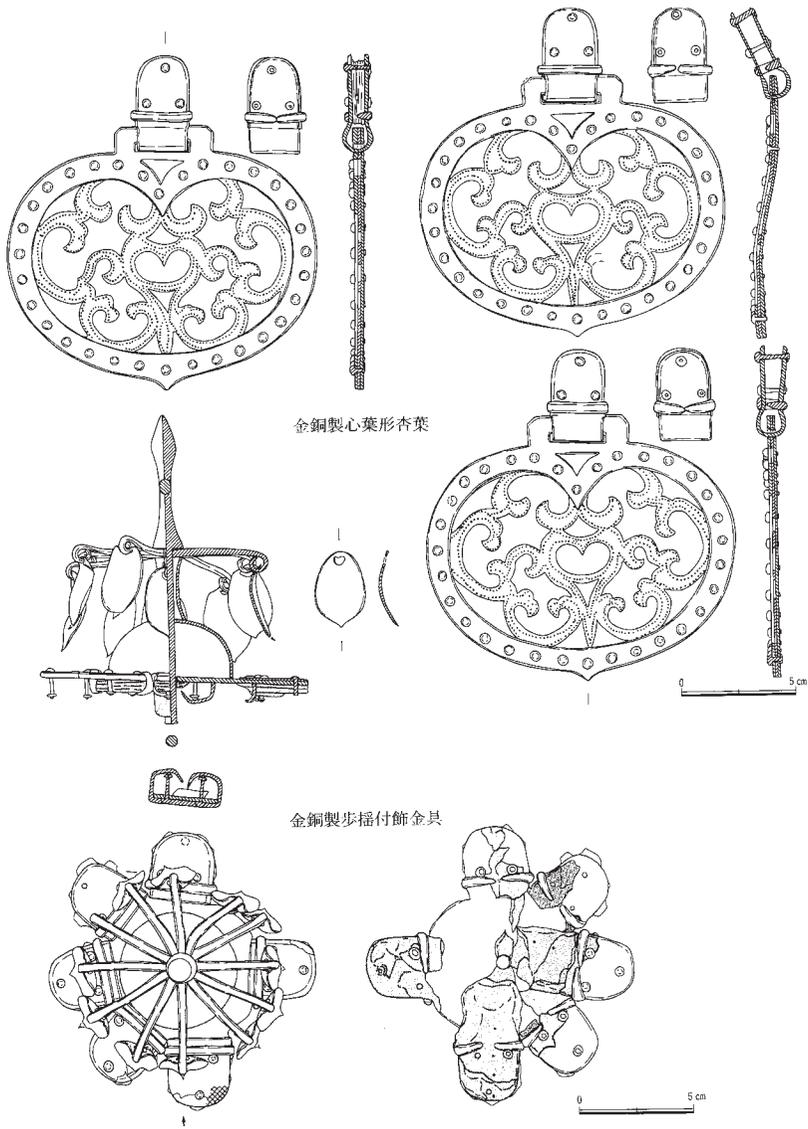


第23図 山王山金冠塚古墳出土の出字形冠



第24図 綿貫観音山古墳出土の三墨環頭大刀柄頭

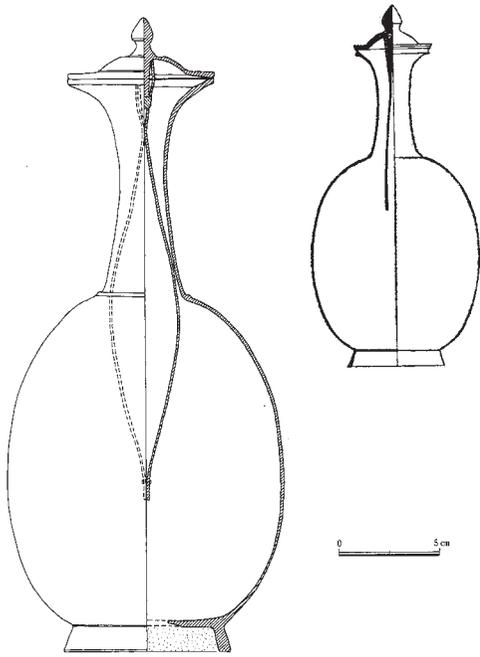
筆者はこれらの事実から次のように考察している。まず、6世紀後半において西毛の最高首長層の連合体制を示す角閃石安山岩削り石積み石室を共有するこれら一連の古墳に新羅系威信財が含まれることや、中には中国系遺物や中国産の原材料を用いたものがあることを重視した。すなわちこれら威信財を、「新羅調」や「任那調」に比定することができること。つまり新羅から大和王権に贈与された威信財の一部を、西毛の最高首長層が分配されたものとみた<sup>(38)</sup>。その根拠として上毛野の豪族は軍事氏族として知られ、『日本書紀』舒明9年(637)には上毛野形名が蝦夷征討の将軍に任じられて戦地に赴いた話が掲載されている。その中に「先祖は海を渡って彼の地を征服し、武勇を後世に伝えた」とあり、朝鮮半島に出兵したことが語り継がれていたものと思われる。さらに天智二年(663)三月には上毛野稚子が将軍として百濟救援軍を率いて白村江



金銅製心葉形杏葉

金銅製歩揺付飾金具

第 25 図 綿貫観音山古墳出土の金銅製心葉形杏葉（上・写真）、金銅製歩揺付飾金具



第 26 図 銅製水瓶 (左及び写真 綿貫観音山古墳、右・庫狄廻洛墓)



第 27 図 綿貫観音山古墳出土の鉄冑

に向かったとある。しかし同時に白村江に向かった他の將軍5人はすべて畿内出身者である。いかに上毛野氏が軍事豪族として中央政府の信頼を得ていたかが窺えるのである。こうしたことから、畿内王権は新羅から入手した威信財の一部を他に比して厚く西毛の最高首長層に分配したものであると思われる。おそらく角閃石安山岩削り石積み石室を共有する古墳造営者たちは擬制的同祖同族として「上毛野氏」を構成した人々であったと考えられるのである。したがってこれらの威信財は優れて政治的な贈答品であり、渡来人が自ら請求した文物でないことはあきらかである。渡来系文物の希少性等の理由から渡来人の存在を議論することの「危うさ」がこうして確認できるのである。

次にこれら威信財の中に中国製あるいは中国系の製品が含まれることについて一考したい。さて、6世紀後半の新羅は統一事業に向けて着々と領土拡大を進めていた。そのため南方の脅威となりうる倭国と好を通じる必要から優品を贈与したものと考えられる（当該期には倭の欽明王と百済の聖（明）王が共同で新羅に対処するために画策しており、新羅としては威信財の贈与、すなわち「新羅調」「任那調」でこうした画策に対処したのであろう）。ところで新羅は中国の南朝と好を通じていた百済に対抗する必要性からも、564年の北齊への遣使以降、独自に北朝へ遣使していた。こうした遣使を通じて中国製青銅器の優品あるいは銅原材料のインゴットを入手したものである。こうして入手した優品の一部を大和王権に再分配したのであろう。したがって西毛首長連合を象徴する各古墳の被葬者が入手した中国製を含む新羅系遺物は、王権が入手した新羅による再分配品のさらに再分配品を含むものと考えられるのである。なお、この後も西毛最高首長層は優品をおそらく畿内の王権から入手していた。このような事実は、7世紀初頭の高崎市八幡観音塚古墳（前方後円墳・100m）<sup>(39)</sup>の副葬品に体现されている。

上記で述べたことを総合すれば、上述威信財を副葬した角閃石安山岩削り石積み石室の被葬者の中に、繰り返しになるが渡来人が含まれることは考えられないのである。考古学は物質資料を研究・分析の素材とする学問であるが、このことからともすれば優品に目が行きがちであることは否めない。実際、優品の持つ情報には多くのものが含まれている。上述したところからも明らかなように、最高水準の技術を考究することはもちろん外交関係の究明にも多くの情報を提供してくれるのである。

しかし、上記の検討からも明らかなように、追究する論点の性格によっては必ずしも優品が有利であるとは限らない。冒頭部分で述べたように、何の変哲もない土器のかけらこそが渡来人の存在を示す明瞭な証拠ともなりうるのである。こうしたことをふまえて考古学研究に邁進する必要性を、改めて感じるのである。

#### 4 古墳時代の渡来人

一衣帯水の位置にある朝鮮半島と日本列島は、古来双方の人々の往来は常にあり、絶えず文化交流が盛んであった。もちろんその中にも特に関係の盛んな時期が幾度か認められる。小稿で指摘したように、古墳時代の東日本においては3世紀、5世紀後半、6世紀後半の3度の波が認められる。これらの往来の濃密な時期は偶然の結果ではなく、当然歴史的な必然性が指摘で

きる。

3世紀の場合、『魏書 烏丸鮮卑東夷傳（第三十）』によれば桓帝・靈帝の頃（2世紀中葉～後半）、楽浪郡の支配力が落ちて、多くの漢人が韓の地、すなわち南方に移動したという（「桓、靈之末，韓滅疆盛，郡懸不能制，民多流入韓國」。韓国発行の『東夷傳』－彭久松・金在善編の瑞文文化社版－による）。これは韓の人々にとって有用な文化や技術をもたらす漢人は歓迎すべき人々であり優遇されたことから、漢人たちの多くは自主的に南方に移動したものと考えられる。この結果は、朝鮮半島南部における2世紀後半からの大型木槨墓出現につながる<sup>(40)</sup>。この動向はやがて日本列島に波及する。これが3世紀における日本列島への新来文化流入につながったものと考えられ、その一部は東日本にまで及んだものと思われる。もちろん、そうした新来文化は自ら伝わるのではなく、その背景には多くの人の移動を伴うものである。

次に5世紀後半の場合、特に東日本においてはそれまで相互に直接的な関係がなかった多くの地域において、一斉といってもよいような状況下において積石塚が構築され始めるという同様の現象が認められた。それに伴って馬匹生産が行われたことを窺わせる状況を指摘することができる。つまり、積石塚は馬匹生産に従事した渡来人の、墓制に表示された出自の明示機能を担うものと考えられるのである。このように、東日本の各地で一斉に馬匹生産を始めること、またその担い手としての渡来人が配置されたことを、各地の首長たちが自主的に行った結果とすれば、同時性や斉一性からみてあまりにも偶然にすぎよう。このため、これら現象の背後に大和王権の政策が絡んでいると考えることが至当と思われるのである。時あたかも「雄略朝」にあたり、よく指摘されるようにこの時期には「人制」の創始等、「中央」と「地方」の関係に変化が認められるのである<sup>(41)</sup>。ただし、各地における渡来人をめぐる状況には差異が大きく、各地社会構造の内部まで規制・誘導するほど大和王権の力は及んでいなかったものと考えられる。

これに対して6世紀後半の場合、西毛の首長連合の墓制である角閃石安山岩削り石積み石室から多くの新羅製優品＝威信財が出土している。5世紀後半の場合は威信財と共に多くの日用品＝土器等が出土するが、今回は威信財のみの出土である。筆者はこの歴史的意義について、既述の通り「新羅調」等を示すものと理解しているのである。

冒頭において述べたように、展示品を鑑賞する際多くの観覧者は優品に目を奪われることであろう。もちろん優品には各時代における技術の粋を集め、王権直属の工房において制作されたものも多い。こうして文化研究のみならず、政治史研究にも有用な資料であることが窺えるのである。しかし、小稿のように渡来人を論じる際には日常使用するような土器類こそが彼ら渡来人の存在を示してくれることが多いことを意識した研究が今後大いに望まれるのである。

本稿は筆者がかつて執筆した「日本出土馬形帯鉤の史的意義」『東アジア地域における青銅器文化の移入と変容および流通に関する多角的比較研究』国立歴史民俗博物館 2006年、「5世紀東国の古墳文化―積石塚を中心に―」『5世紀代日本列島の古墳文化』韓国大東文化財研究院 2008年を要約したものをもととして、これに新たな観点を加えて書き起こしたものである。

## 註

- (1) 飯能市郷土館『高麗人集結—靈龜二年にやってきた開拓者たち—』2016年
- (2) 以下の記事は、いずれも『日本書紀』持統天皇条である。持統元年三月丙戌「以投化新羅人十四人。居干下毛野國。賦田受稟使安生業」、持統三年夏四月癸未朔庚寅「以投化新羅人居干下毛野。」、持統四年乙卯「帰化新羅人等居干下毛野國。」
- (3) 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団『西下谷田遺跡』2003年
- (4) 宇都宮市教育委員会『前田遺跡』1991年
- (5) 芳賀町教育委員会『免の内台遺跡』1992年
- (6) 重見泰『新羅土器から見た日本古代の国家形成』学生社 2012年
- (7) 小山岳夫「巨大化する弥生集落—信州の弥生時代中期後半粟林期における集落の大規模化とその背景の考察—」『専修考古学』第7号 1998年
- (8) 長野市教育委員会によって発掘調査が実施され、報告書も刊行されている。
- (9) 野沢誠一「銅釧・鉄釧からみた弥生社会」『長野県立歴史館研究紀要』第8号 2002年
- (10) かながわ考古学財団『河原口坊中遺跡第2次調査』2015年
- (11) 佐久市教育委員会『北一本柳遺跡Ⅲ』2010年
- (12) 石川日出志「八代宮司遺跡の多紐鏡・玉・鉄斧一括資料を考える」『佐久考古通信』No.108 2011年
- (13) 嶺南文化財研究院『慶州舎羅里遺跡—木棺墓、住居址—』2001年
- (14) 東義大校博物館『金海良洞里古墳文化』東義大校博物館學術叢書7 2000年
- (15) 高久健二「東アジアの鉄器文化—朝鮮半島を中心に—」『弥生のムラに鉄が来た!!—河原口坊中遺跡の鉄斧はどこから来たのか—』2017年
- (16) 上田市教育委員会『上田原遺跡』1996年
- (17) 木島平村教育委員会『根塚遺跡』2002年
- (18) 風間栄一他「長野市浅川端遺跡出土の馬形帯鉤」『考古学雑誌』第89巻第2号 2005年、風間栄一「馬形帯鉤の分類と系列把握—日本出土の馬形帯鉤をめぐる—」『東アジア地域における青銅器文化の移入と変容および流通に関する多角的比較研究』国立歴史民俗博物館 2006年、土生田純之「日本出土馬形帯鉤の史的意義」『東アジア地域における青銅器文化の移入と変容および流通に関する多角的比較研究』国立歴史民俗博物館 2006年
- (19) 福尾正彦「宮内庁書陵部保管の馬形帯鉤について—出土地等の再検討—」『東アジア地域における青銅器文化の移入と変容および流通に関する多角的比較研究』国立歴史民俗博物館 2006年
- (20) 弥栄町教育委員会『いもじや古墳・奈良岡遺跡発掘調査報告書』1982年、同『奈良岡遺跡発掘調査報告書 第3次』1986年。朝鮮半島から北部九州を通して各地に新来文化が広がるという従来のイメージと異なり、直接日本海を渡って新来文化の伝来が北近畿に認められるという主張は、野島による鉄器の研究や小寺によるガラス玉の分析などがある。いずれにしても朝鮮半島からもたらされる文化伝播の道は、決して一つに限定されるものではなく様々なルートが想定されている。野島永「弥生時代の対外交易と流通」『丹後の弥生王墓と巨大古墳、季刊考古学・別冊10』雄山閣 2000年、小寺智津子『古代東アジアとガラスの考古学』同成社 2016年
- (21) 土生田純之「東国の渡来人—5世紀後半を中心として—」『古代東ユーラシア研究センター年報』第1号 2015年
- (22) 下津谷達男他『遠江内野古墳群』浜北市教育委員会 1975年、浜北市教育委員会『内野古墳群』2000年
- (23) 大塚初重「長野大室古墳群」『考古学集刊』第4巻第3号 東京考古学会 1969年、駒沢大学考古学研究室『長野大室古墳群—分布調査報告書—』1981年、長野県教育委員会『大室古墳群』長野県

- 埋蔵文化財センター 1991年、大塚初重・小林三郎編『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅱ』東京堂出版 2006年、明治大学文学部考古学研究室『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅲ』六一書房 2008年
- (24) 栗岩英治「大化前後の信濃と高句麗遺跡」『信濃』第17巻第5・6号 1938年
  - (25) 大塚初重「積石塚古墳と合掌形石室」『長野市誌 歴史編 原始・古代・中世』長野市 2000年
  - (26) 高崎市教育委員会『剣崎長瀬西遺跡Ⅰ』2002年、専修大学考古学研究室『剣崎長瀬西5・27・35号墳—剣崎長瀬西遺跡2—』2003年
  - (27) 山下誠一「飯田盆地における古墳時代前・中期集落の動向—発掘調査された堅穴住居址をもとにして—」『飯田市美術博物館研究紀要』第13号 2003年
  - (28) 飯田市教育委員会『北方西の原遺跡』2017年
  - (29) 白石太郎「伊那谷の横穴式石室」『信濃』第40巻第7・8号 1988年
  - (30) 右島和夫「角閃石安山岩削石積石室の成立とその背景」『古文化談叢』30集下 1993年
  - (31) 徳江秀夫「上野地域の舟形石棺」『古代学研究』1992年
  - (32) 玉村町教育委員会『小泉長塚遺跡』2006年
  - (33) 玉村町教育委員会『小泉大塚越遺跡』2006年
  - (34) 前橋市教育委員会『金冠塚（山王二子塚）古墳調査概報』1982年
  - (35) 群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団『綿貫観音山古墳Ⅱ』1999年
  - (36) 王克林「北齊庫狄廻洛墓」『考古学報』1979年第3期 1979年
  - (37) 国立歴史民俗博物館教授、齊藤努氏の分析結果とご教示による。未発表。
  - (38) 土生田純之「古墳時代後期における西毛（群馬県西部）の渡来系文物」『国立歴史民俗博物館研究報告』158集 2010年
  - (39) 高崎市教育委員会『観音塚古墳調査報告書』1992年。その後、新知見を踏まえた次の図録が刊行された。高崎市観音塚考古資料館『改訂版 観音塚古墳の世界』2015年
  - (40) 日本列島の諸地方に強い影響を与えた半島東南部の代表例として、慶尚南道金海市良洞里遺跡をあげておく。註（14）に同じ。
  - (41) 直木孝次郎「人制の研究」『日本古代国家の構造』1958年